

幸福に暮らした二人

小川未明

青空文庫

南洋のあまり世界の人たちには知られていない島に住んでいる二人の土人が、難船から救われて、ある港に着いたときでありました。

砂の上に、二人の土人がうずくまってあたりの景色に見とれていました。その港はかなり開けたにぎやかな港でありましたから、華やかなふうをしたいろいろな人が歩いていました。またりつばな建物も見られました。そして、あちらには、煙突から黒い煙が上がって、その煙は雲切れのした大空を沖の方へとなびいていました。

それから目に見るもの、また、耳に聞くもの、一つとしてこの二人の黒んぼの心を驚かさないものはなかつたのです。二人はあちらに見える、白く塗った三階建ての家屋を見ましたときに、それがなんであるかすらもよくわからなかつたのでした。しかし、自分たちと異つた人間がそばの家々から顔を出してのぞいたり、またその中に動いたりしているようすなどを見ると、あちらの美しい建物の中には、もつと力の強い、偉い人間が住んでいるのだらうということを想像しました。それにつけても、こんな美しい街がどうしてできたものか、まただれによつて、どうして美しく地上にいろいろなものが造られたのであるか、それを考えることすらが、二人にはできなかつたのであります。

太陽の光は、故郷の土の上に照りつけるほど強烈ではなかった。そして、それだけ夢を見ているような、うっとりした気持ちにさせたのであります。二人はあの怖ろしいあらしの夜を怒濤にもまれて、真つ暗な中を漂っていたこと、また、夜が明けると、青い、青い、はてしもない海の上を、幾日も、幾日も漂っていたこと、そしてそのあげくに、見も知りもしない船に救われたこと、そして、いま、このどことも知らない港について、陸に上がって砂原にうずくまって、日の光を浴びているということすら、このときは頭の中に思い出さずに、ただ、うっとりとしたあたりの景色に見とれていたのであります。

あたりを往來する人々は、この二人のいるそばに近寄って、珍しそうにながめて、笑つてすぐにゆくものもあれば、また、しばらくは立ち止まってゆくものもありました。人間だということだけは同じであるが、色も、姿もなにひとつ同じものはなく、そして、言葉すらまったく通じなかつたので、たがいに顔を見合わしながら、心のうちでは不思議なものを見るものだというくらいに思つたのであります。

二人の黒んぼは、極度に自分らの身のまわりに集まってくる人たちをおそれていました。こんなになりつばな街を造ることのできる人々だから、どんなに力があるであろう。

また、どんなことでもなし得ないことはなからうから、自分たち二人の命は、まったくこの人たちに自由になされるものだというように思ったからであります。

二人の黒んぼを見た、港の人々は口にこそ出していわなかつたが、

「なんとという怖ろしい顔つきをしている野蠻人であろう。人間を食うというのは、この種族ではなからうか！」と、心に思つたのであります。

南方の太陽に近い下の野原では、やしの木は、もつと元氣よく、もつと葉が濃く、丈が高くしげっていました。二人はこの港の郊外にも、やしの木が、ところどころに影が黒く、日に照らされて立つているのを見たのであります。

この木の影を見たときに、二人は、どんなになつかしく思つたでありましょう。

「やはり夢ではなかつた。また死んでいつてからの極樂でもなかつた。やはりこの世の中の景色なんだ。」

こう思つて安心すると同時に、ここからは遠く隔たっている、故郷のことを思い出さずにはいられませんでした。このとき、ある日、海に出て、あらしのためにさらわれた記憶が蘇つたのであります。

「自分の故郷はどちらだろう……。」「

ふたり 二人の黒んぼは、いい合わしたように、左を見たり、右を見たりして、涙ぐみました。日の光がかげつて、天気が変わりそうになったので、そばに立っている人々は、しだいに少なく、みんなあちらにいつてしまいました。

ちようどこのとき、一人のおじいさんがつえをついて、前を通りかかりましたが、懐から財布を出して、一つの銀貨を二人のうずくまっている前に投げ出して立ち去りました。ぴかぴか光る銀貨は、砂の上に落ちて光っていました。二人の故郷では銭というようなものがないから、それがなんであるかわかりませんでした。ただ、その美しい光に魅せられて、二人のうちの年とったほうが、真っ黒な毛の生えた、つめの伸びた黒い手でふいに、小鳥をつかむときのようにすばしく銀貨を握ってしまいました。

ふたり 二人のものに、ものを恵んでくれたものは、このおじいさん一人だけでした。それほど、あまり姿が違っていたので、この街の人々には、かわいそうというほどの同情の念が起こらなかつたのであります。

ふたり 二人は、幾日めかで陸に上がつて、はじめて砂の上にうずくまつたのであつたが、まもなく、船の人がきて、二人は、あちらに連れられてゆきました。二人は、ただこうして街の光景をながめただけでありました。そして、ふたたびこの港から離れてしまつて、

航海こうかいがつづけられたのであります。船ふねは、南みなみへ、南みなみへとゆきました。

この二人ふたりは、村むらにいるときから仲なかがよくて、ちようど兄弟きょうだいのように思おもわれたのであります。が、ひとたび難船なんせんをして、もう助たすからないものと思おもつたのが、救すくわれましたから、二人ふたりの仲なかは、いつそう親密しんみつになりました。船ふねの中でも、二人ふたりは、おじいさんからもらった銀貨ぎんかを出だして、かわるがわるそれを掌ての上にうえのせては、額ひいたあを合あわせてのぞきながら、「これは、二人ふたりの仲間なかまのものだ。」といつていました。銀貨ぎんかには偉えらそうな人間にんげんの顔かおが描えがかれていました。二人ふたりは、それが貨幣かへいであつて、それと同じおなじものが、数かずえることのできなほどたくさんにあつて、世界せかいの文明ぶんめいがゆきわたつてゐる国々くにくにに流りゅう通つうしてゐるということなどは知りませんでした。だから、「なんにするのだろう?」と思おもつてしまいました。もとより言葉ことばも通つうじませんから、船ふねの人々ひとびとと話をはなしするというようなこともありませんでした。

「偉えらい人ひとが、これを胸むねにつけるのだろう。」と、年上としうえの甲こうのほうがいいました。

「それにちがいない。」と、年下とししたの乙おつはうなずきました。

「あのおじいさんは、白しろいひげをはやしていたが、きつと偉えらい人間にんげんなのだろう。」と、甲こうはいいました。

「きつと、あの人が、あの島の頭かもしれない。それで、よく難船をしても助かったというので、これをくれたのかもしれない。」と、乙は答えました。

二人は、それを持って故郷に帰れるのを、真に心の中で誇りながら、幸福に感じていました。それから、いろいろのことがありましたけれど、とにかく、ついに二人は、無事に故郷の島に着くことができました。

この島の強い、幾人かの頭というようなものは、みんな二人よりは年上であります。そして、強いものほど、頭蓋骨をたくさん家の中に並べていました。その頭蓋骨はどうしたのかといいますが、たがいに武力を争わなければならなかったり、また、口では話がかたがたに、力できめなければならなかったときに、戦って倒した相手の頭でありました。だから、それをたくさん持っているものほど、村の人々に尊敬せられ、恐れられたりしていたのであります。

二人のものが、自分らの部落に帰りましたときに、みんなは、どんなにびっくりしたてありましよう。もう難船をして死んだものと思っていました。そして、もうそのときから、日数もよほどたっていましたので、帰ってこないものとあきらめていました。二人の生きて帰ってきたことは、彼らにとつては信じられない奇蹟でありました。

「おまえがたは幽霊じやないか？」といつて、黒んぼの仲間なかまは、二人ふたりのものを取り囲かこみました。二人ふたりのようすは、島しまを出でるときとは、まったく違ちがつていました。手てや、足あしや、顔かおの毛けはいつそう深ふかくなつて、そして、見違みちがえるほどにやつれていたからです。

「なにが幽霊ゆうれいなものか、俺おれたちはみんなおまえがたの顔かおを覚おぼえている。」と、二人ふたりはいつて、だれかれの名なをいつては、なつかしさのあまり抱だきつきました。

すると、みんなは、どうして助たすかつたか？ どうして帰かえつてきたか？ といつて、口くちぐ々にたずねました。二人ふたりは、難船なんせんしたときの模様もようや、暗くらかつた夜よるのものすごい光景こうけいや、救すくわれてから港みなとに着ついて、陸りくに上あがつて、それはそれはいいつくされうつくない美しい、不思議しぎな世界せかいを見てきたようなことを話はなしました。そして年上としうえの甲こうは、

「その国くにの王おうさまが、二人ふたりに、このぴかぴか光ひかるものをくださったのだ。これさえ持もつていればどこへでもゆけるありがたいものだといつてくださったのだ。」といつて、銀貨ぎんかをみんなに示しめしました。

「ここに書いてある怖おそろしい人ひとが、その王おうさまなのだ。」

太陽たいようの光ひかりはまぶしく、銀貨ぎんかの面おもてに反はん射しゃしました。みんなは、この光ひかりをおそれるようあとしきに後退あとしきりをしました。そして、目めをみはりました。

「えらいものを持つてきたものだ。俺たちは、まだこんな光るものを見たことがない。」
みんなは、手に手に、武器を持つていました。それは、竹槍や、たまたま海岸に打ち上げられた難破船に着いている、鉄片で造られた剣のようなものであります。しかし、彼らはまだ、こんなにぴかぴか光る金屬を見たことがなかったのであります。そのとき、いちばん狡猾な、悪智恵のある年とつた男だけは、みんなが手にとって不思議そうにながめている銀貨に、自分一人は手を触れようとせず、すこし隔たつたところから、みんなのようすを嘲笑つた目でにらんでいました。

「あのぴかぴか光るものは、いつか俺のものになるんだ。ばかものめ。」と、その目つきはいつているのでした。

この不思議な光るものが、部落に入つてきてからは、みんなにもそれが欲しいという欲望が起こりました。

「人間の頭蓋骨よりか、あのぴかぴか光るものに描いてある頭のほうがいい。あれを胸のあたりに下げていたら、いちばん偉い人間になれるのだ。」という考えを、みんなは頭の中にもつたのであります。そうして、いままでよりか、みんなに一つ欲望が増したので、いつか、この光る銀貨のために争いが起こらなければならぬと思われたのでした。

「ほんとうに、いつこの光る大事な品を盗まれるかおしれないから、油断はできないぞ。」と、甲と乙とはいい合つて、二人は、それを大事に守つていました。

二人は、ほかにだれもないときに、銀貨を取り出して見入っていました。すると、遠い、港の街や、空や、丘や、木立の影が、ありありと夢のように、記憶に浮かんでくるのでした。もう、二度とは見られなくなった、遠い、遠い、かなたの国の景色であります。そして、おじいさんがつえをついてきて、二人に、この光るものを投げていった有り様が、なお昨日のように念頭に思い出されるのであります。二人は、そのことを思うと、うつとりとして、心は青い、青い、海を越えてかなたに憧れたのであります。

「これは、命よりも大事なものだぞ。」と、二人はいい合つて、おたがいの心をいましめました。

部落にはもう一人強い男がいました。その男には、美しい娘がいました。ある日のこと、その男は甲のもとへやつてきました。

「私の娘をおまえにやるから、いつかのぴかぴか光るものを私にくれないか。」といいました。

甲は迷いました。その男の娘というのは、評判の美人であつたからであります。そ

して、すぐには返答がでなかつたので考えておくことにしました。甲は、独りになつて、その娘の姿を目に思い浮かべました。かわいらしい口もと、白いきれいな歯、そして、二つの美しい目の光は、大事にしているあの金属から放つ光よりも、もつとやさしいうるおいのあるものでありました。甲は、もう、その娘を自分のものにされることなら、あの大事なものを手放してもいいという気になりました。そして、そのことを乙に相談しました。

すると、乙は目に涙をたたえながら、

「あの暗い、怖ろしい夜のことを忘れたか？ 俺たちは、ああして助かつたのだ。そして、あの港に上がつて、ああしてふたたび生きてここに帰つたのだ。二人は苦勞を一つにしてきたのに、おまえは自分一人の幸福のために、たいせつな記念を失つていいのか？」といいました。

甲は、自分の考えが悪かつたと悟つて、乙にわびたのであります。その後、二人はあいかかわらず睦まじく、仲よく暮らしていました。

かの狡猾な悪智恵のある男は、部下をたくさんにもつていました。男は、どうかして、二人を殺して、あの光るものを奪い取ろうと思ひました。その男が、計略をめぐらし

ているということ、二人は耳にしました。そして、もう一刻もここにいるのが危険になりましたときに、二人は相談をして、どこか安全なところへ逃れることにいたしました。

ある夜、二人は、ひそかに部落から逃れ出ました。そして、谷を伝い、山を越えて、高らかに波の打ち寄せる海岸までやってきました。

「もうここまでできてしまえば安心だ。まあ休んで、これからゆく先のことを考えよう。」と、甲はいいました。

「ほんとうに、俺たちは、どこへいったら、安心して楽しく暮らすことができるだろう。」と、乙はいいました。

その夜は、空がよく晴れていました。そして、一面に海をおおうた空には星が輝いていました。

砂の上に横になつて、しばらく空をながめていました甲は、ふいに体を起こしました。

「俺は、あんなに美しい星が毎夜光っていることを知らなかった。あの星さえ見ていたら、あの港も、おじいさんも、白い家も、俺たちの乗っていた船もみんな思い出せるではないか？」といいました。すると、やはり黙つて空を仰いでいた乙はうなずきました。

「おまえ、あのぴかぴか光るものはどうした。海の中へ投げてしまえ。あれもきつとだれも手のとどきはしない空に上つて星となるのだから……。」「といいました。

甲は銀貨を取り出して、遠く海の中に投げてしまいました。

このとき海の上は、いつそう明るくなつたような気がしました。彼らの部落は、また昔の平穩に帰りました。

——一九二二・一〇作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「幸福《こうふく》に暮《く》らした二人《ふたり》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幸福に暮らした二人

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>